

イスラーム理解という話題を巡って

—「女子割礼」を例として—

稲賀 繁美

純粋に愛すること、それは隔たりを受け入れることである、自分自身と自分の愛するものとの距離をこよなく愛することである。

シモーヌ・ヴェーユ

問題設定

異文化理解の困難さという以前に、その困難さを学生諸君に伝えることの困難さを論ずる必要があるだろう。大学の授業を通じて伝授される情報というものの本質について、教師の側と学生の側との間には乗り越えがたい関がある。文化理解における誤解といえ、とかく研究者とその異文化のフィールドとの間にはどうしようもない理解のギャップがあるとか、知的理解と誤解とは同じコインの両面だといった議論が盛んである(1)。だがそれにもまして決定的な擦れ違いが、学生と教官のあいだにそうとは気付かれることもなく存在する。その擦れ違いは、たとえ気付かれたとしても、学問以前の事としてあらかじめ排除される性質のものだった。それは学生には学問が通用せんといった教官同士の酒飲み話の愚痴か、先生のやとること、どんくそうて阿呆くそうてついでに行けへんといった学生の嘲笑かに分裂するだけで、それ以上の考察の材料とはならなかった(2)。以下の考察では、学問以前の世界像と学問的業績とのあいだのこのやっかいな関を問題にしたい。

だからここでは「学生向きの参考書」という場を借りて安易に業績づくりの一環とする風潮には与しない。そもそもそんな参考書によって知識を注入される必要を感じている学生などいまでも存在するまい。参考書が売れるのは、それが試験で単位を認定してもらふ儀礼や、大学院に進学す

る際に必須のメニューとして強制される限りでのことでしかない。以下この不毛なギャップを、あくまで「学際的教育の方法論の研究」の一環として取り上げたい。教師側も学生側も毎日の教育の現場で経験しているが客観化できずにいるこの身近な「異文化理解の困難さ」の背後には、現在の日本の教育が、義務教育から高等教育にいたるまで抱え込んでいる、より大きな異文化理解不全症があぶり出されてくるはずである(3)。

以下次のような順番で議論をすすめる。

1. 取り上げた授業課題および進行状況
2. 伝達した情報
3. 学生の反応
4. 教官側の意図との食い違い
5. 工夫すべき将来の課題
6. 結論

1. 取り上げた授業課題および進行状況

「第三世界とフェミニズム」。これが三重大学一般教育総合科目1993年度女性論において求められた論題であった。この授業は月曜日7-8限(3:00-4:40)後期(9-2月)に、人文学部岩本美砂子助教授を開講責任者として組織された。学内、学外からひろく11名の講師を招き、リレー式にそれぞれの話題を提供する形式の授業である。その目標としては「文化的、社会的存在としての女と男の関係をとりまく状況・思想・制度について、国際比較をまじえて講義し、学生が自らを対象化し、反省・考察する姿勢を身につける助けとする」とある(「講義概要」より)。より詳しくは三重大学一般教育でまとめた『総合科目冊子』1993年度版をご覧いただきたいが、「第三世界とフェミニズム」は、10月18日のオリエンテーション、10月25日の「現代

日本における女性-1(講師は『主婦が歩きだすとき』[BOC出版]、『女四〇才の出発』[学陽出版]などの著者高橋ますみ氏)、11月1日の「現代日本における女性-2」(人文学部専任講師 村上直樹氏)につづく11月8日の講義であった。

1-1 授業では前半稲賀が担当して、エジプトからソマリアさらにはニジェール川沿岸からサハラ以南の西アフリカにひろく残る「女子割礼」について紹介し、この風習について、現地側の解釈と欧米側の解釈とのあいだにはおおきな隔りがあり、またそれが保健政策や女性解放をめぐる運動とも連動してさまざまな対立や摩擦を生んでいる現状を示した。後半では、マグレブからアラビア半島を含めたアラブ圏、イスラーム文化圏で広くフィールド・ワークの経験のある目崎茂和教授が、シャラブを頭に巻いてシリアの民族衣装に身を固め、登壇された。スライド映写しながら、アラブの村落における女性たちの男顔負けの力強い生き様を、さらにはベドウィン族テントでの結婚式などの儀礼の機会に撮影された貴重な――つまり外部の男性によって撮影された写真としてはたいへんに例外的・特権的な一映像を交えて紹介した。

1-2 また授業を補うために配布したプリントでは、「女子割礼」を女性の人権に対する侵害として糾弾したいいわゆるホスケン・リポートの日本語訳の抜粋および添付図表、またこれに批判的な意見を交えた吉田康彦『美辞麗句を使うべし――国連十年の異文化体験』を並列した(註5)。さらにこうした社会的風習とイスラーム教義との関係を説明し、イスラーム圏における近年のイスラーム原理主義と女性解放運動との複雑な実態を平易に要約した、^{89%}宮治美江子「北アフリカの女性とイスラーム」、『月刊アフリカ』(1992年8月号)および「アラブ・イスラーム世界の女性と現代」、『学術月報』(文部省、Vol. 45, No. 9, Sep. 1992)、さらにはナイラ・ミナイ『イスラームの女たち』(註12)から、現代のエジプト、チュニジアの女性の「社会進出」について具体的な事例と証言を上げている箇所を抜粋して学生各自に配布した。

1-3 最後に参考書としては、以上にあげた文献のほかに、片倉もと子氏の話題となった著作『イス

ラームの日常生活』(岩波新書、1989年)、また国立民族学博物館発行の『季刊民族学』8巻28号1984年の該当する記事(片倉もと子「荒野に生きる女たち」)を薦めておいた。なお稲賀は以下のべるように、話の枕として、犬養道子『国境線の上で考える』(註4)を使用したことを付記しておきたい。これはたいへんに貴重な報告であり、また重要な著作だが、現在の日本の大学生相手に一般教育の水準で利用するには、かなりの前提説明とさまざまな注意を要することに、この授業で気づかされることになるだろう。

2. 伝達した情報

2-1 まず稲賀は上記の犬養の著書を利用しつつ、導入として以下の三点を指摘しておいた。まずイスラーム圏で育ってきた青年たちにとって、初めて西欧的な社会に触れるときの驚きがいかに大きく、場合によっては精神的な危機さえ招きかねないこと(2-1-1)。つづいていわゆるアフリカの部族的社会へ外部からそれも女性が参入した場合にいかなる扱いをうける可能性があるか、ということ(2-1-2)。そして第三に衛生観念の差がいかに医療活動をむづかしくしているか(2-1-3)。

2-1-1 第1の点は著者自身もパリ大学都市モロッコ館で経験のあったことであるが、イスラームのとりわけ女性たちは公共の空間で用を足すという経験がない。大学の寮にあるトイレは北欧などでは男女共用の場合もあるが、これでは彼女たちはとてもトイレに行けない。いきおい自分の部屋の床のうえでやってしまって、清掃係と悶着を起こし、はては西欧国籍の学生たちがアラブ系の学生追放を求めると、アラブ系の学生が差別されたといきり立つ、といったハウス・キーピング上の大問題にまで発展する。またやや慣れて来た学生たちでも、一般に紙で後始末をする習慣がない。砂で手を洗うのが乾燥した沙漠地帯では当たり前であって、ましてや水など貴重品であるから、水洗便所の機能そのものが当初は理解できなかったりする。洗面器のなかにあるべからざるものが残っていたりして、西欧の学生が卒倒する、といった風景は、いわば新学期の年中行事に近い。翻って考えれば、

日本でも西欧人に日本家屋に上がるときには靴を脱げというのがなかなか理解してもらえないどころか、妙に誤解されて相手が真っ赤になって怒ったりする悲喜劇はよく知られている。ましてや銭湯に連れて行って、シャボンごと湯舟にジャボンと飛びこまないようにちゃんと注意するのはなみ大抵の苦勞ではない。

2-1-2 これが第2点に結び付く。日本の常識は世界の非常識とはよく言われるが、それがどこまで実感として掴めるか。たとえば耳にピアスの穴がないと、それだけで売春婦扱いされる文化圏はラテン・アメリカからブラック・アフリカまで実は広範に存在する。そうした社会から日本にきた女子高校生が学校では耳飾りは禁止といわれたときのショックはどうだろう。高校時代そうした留学生と先生のやりとりを見た諸君もいるはずだが、君達はそれをどう考えたか。君達には彼女らのショックがショックとして理解できたか。翻ってみればアフリカでは女性が職業をもって金銭を稼ぐということが理解してもらえない部族が「まだ」多く存在する。そうした社会に記者としてひとりの女が入ることがいかなる混乱をもたらすものか。ほとんどのカメラマンは男だから、こうした事態は気付かれもせず、報道される可能性からあらかじめ排除されてしまう。だからその実態も知られない。そもそも自分の夫、兄弟以外には体を見せることはご法度の社会で、身を隠す樹木も草むらもないような場合には、それこそ生理的欲求の処理が不可能になる。我慢できずに仕来りに触れる手洗いにおよんだが最後、半殺しにされたり即刻国外追放になった例も、犬養さんの本には描かれている。そこには現場を知り、御本人が人間扱いされなかった経験をもつ人ならではの痛烈な筆致がある(4)。

2-1-3 第3にこれが医療問題、医療援助をやたらとややこしくする。アミーバー赤痢にでも罹ったとしても、例の仕来りのために、集落から隔離された女子用便所が役に立たない関係上(どうやってそこまで行くのか)、日常の生活空間があっという間に汚物にまみれた感染の培養器に変ずる。またたとえそれが医者であっても、病気の女はよそ者の

男に肌を晒すわけにはいかない。診療を受けた「不貞」の妻が射殺され、診療をした「外国の男」も殺害された、という例もすくなくない。また外国人の女医から受け取った薬を男たちは服用もせずに捨ててしまう。しょせん女性の地位が山羊にも劣るのだから、とは犬養さんの説明だが、この説明は必ずしも部族の内側の論理とは反りがあわないだろう。外から来た女という彼女の立場は、この部族の内部には最初からそして徹頭徹尾存在しない視点なのだから。

2-2 こうした舞台設定のうえで問題になるのが、本題である「女子割礼」だろう。授業では、まずその実態(2-2-1)、ついで現地でのその認識(2-2-2)、さらにはホスケン・リポートに見られる「女子割礼」告発側の認識(2-2-3)、最後に世界保健機構(W.H.O.)や非政府組織(N.G.O.)の認識(2-2-4)、という四段階の説明を加えた。

2-2-1 まず最初に、そもそ「女子割礼」とは解剖学的に何なのかを知らない学生を前提として、吉田康彦の著書の要領良い説明を利用し、またホスケン・リポートにある地図と統計表を基に実態を紹介した(5)。(a)スニ式と呼ばれるクリトリスの包皮の環状切断、(b)クリトリスと小陰唇の切除、(c)さらには膣口縫合による陰部封鎖の三種類を併せて「割礼」を受けている女性の数は、アフリカだけで約1億人、東南アジアを含めれば1億5千万人を上回るというのが、WHOの推定である。(b)と(c)を実施している国はアフリカ25ヶ国に及び、ジブチでは95パーセント、ソマリアでは90パーセント、スーダンでは80パーセントの未婚女性が、幼児期、あるいは遅くとも思春期までに「割礼」を受けている、といわれている。

2-2-2 ついでホスケン・リポートを中心に、現地での認識をいくつか証言を中心に引用した。まず(d)スーダンの場合、ほとんどの女性は何世紀にもわたる慣習には納得づくで、感情的にも同意をしていること。

(e)当日は少女は一番良い服で飾り立てられ、「花嫁」と呼ばれることで、この儀礼が将来の結婚とそれによって期待される性的な役割を教育する通過儀礼をなしていること。さらに

(f)少女たちは幼いころから手術の話をよく聞かされているが、現場をみることは許されないこと。そしてこうした文化的な規範のなかで成長するにつれ、「割礼をしていない娘は受け入れられない、不浄であるとして誰からも相手にされず、また結婚相手としても認められない」という社会一般の考えを受け入れるようになっていくことを確認した。

(g)そもそもスーダンははじめ多くのアフリカの女性たちは、手術を当然だと思っていて、それが不要だとも、ましてや世界ではこうした手術が行われていない国があることさえ知らない、「立派な女性」であれば当然その陰部は閉ざされているものと信じていること、

(h)また母親たちも娘の将来を思えば割礼に反対する意思はなく、また男性にとっても「割礼をしていない母親の息子」と呼ばれることが、また少女にとっても「割礼をしていない娘」といわれることが、スーダンの人々にとって「今でも」最大の侮辱であること、という認識のあることを付け加えた。

(i)「割礼をしていないことは恥ずべきことだ。性欲の激しい女性と結婚したいと思う男はいない。娘を割礼しないのは外国人だけ」という証言もプリントに示しておいた(6)[なおa, b, c, の略号は分類の都合上、引用者(稲賀)が付した]。

2-2-3 そもそもこうした割礼は医学用語としてはcircumcisionと呼ばれるが、ホスケン・リポートではgenital and sexual mutilationという「結果として不具を招く切断」という意味のこもった用語が選ばれている。こうした用語の選択にすでにホスケン・リポートの政治的な立場が表明されていることを、まず喚起しておいた。そのうえで、ホスケン・リポートの主張にたいして批判的な分析を加える魂胆であったが、いささか時間不足となってきたので、その詳細には授業では立ち入らず、学生たちには配布したホスケン・リポートの主要な部分の抜粋を授業後もう一度読んでからリポートをまとめるように指示するにとどまった。

2-2-3-1 ホスケン・リポートの検討

ここで、授業では省略した部分であるが、いささか先回りして、このホスケン・リポートを批判的に

検討しておきたい。いかにも感情に流されたその糾弾口調の雄弁な文章は、ほとんど政治的プロバガンダ同然で、必ずしも論理的な脈絡が明確でないが、その要点を列挙すれば以下のようになろう。

(j)「このリポートの目的は女子割礼、生殖器切除を廃絶することにある」。

(k)というのもこの行為は「人種、まず民族には無関係に、女性にたいする著しい人権侵害である」からだ。

(l)ついで、女性割礼は女性の生来の能力を損じ、奪いとすることで、女性の本質と精神とを冒瀆しており、男性の搾取と要求とに女性を屈服させるものである。

(m)さらにこの手術は医学的な見地からみても女性の健康にゆゆしき影響を及ぼしている。それが医療従事者によって高額な謝礼を代価に実施され、また政府関係者によって隠蔽され密かに擁護されるだけでなく、「衛生計画」の名の下で推進までされている現状は放置できない(7)。

2-2-3-2 (1)に言う女性の本質とは、性欲の是認、オルガズムの権利の主張らしい。性にかんする正しい知識に立脚すれば当然のこうした権利を認めるべきだ。しかるに発展途上国では学校教育においてこうした知識が伝達されず「女性は性欲をコントロールできないとか、セックスにとりつかれている」といった「神話がはびこっている」。これに対して「知らせ、知る自由を求める闘争」を展開して「出産や性についての無知からみんなを解放する」ことが当然の目標として掲げられる(22, 25頁)。すでにこうした論旨からも明白なように、「女子割礼」は西欧の女性解放論者にとって格好の、そしてなんとしても看過できない攻撃目標として浮き上がってきた。1980年、コペンハーゲンでの「第二回国連婦人会議」以降、「女子割礼」がさまざまな団体から「告発」されるに至った脈絡も見えて来よう。

2-2-3-3 それでは告発の対象と告発の性格はどのように規定できるだろうか。まず(k)にあるように、女子割礼廃絶という目標は文化的差異に無差別な普遍的目標であるとされるが、その場合の攻撃目標としては「アフリカや中東」、「その多くの都市を含むイスラム社会」という規定が執拗に繰り返

返される。西欧の啓蒙された、解放された女性の立場から、いまだ隷属を抜け出せない悲惨な男性支配に屈しているイスラーム女性、アフリカの伝統社会のなかで人間としての尊厳を認められていない女性たちを救おう、という使命感が強烈に感じられる。開発途上国の社会を「その無知から解放」(22頁)するという、先進国の優位を道徳的な水準でも正当化しようとする論理である。翻せばこれは「遅れた」アラブ社会、アフリカ社会さらにはイスラームに対する自分たちの密かな、そして許されぬ蔑視を隠蔽し、それを「啓蒙」の名によって合理化し、免罪符とした偽りの言説であることも否定できない。

2-2-3-4 つぎに注目すべきは「男性の性的優越感を証明する手段として行う女兒への中世的な性的暴力」(20頁)といった情緒的な形容詞による一方的な決め付けであろう。ここには差別を糾弾するに差別をもってする「文化的優越感」が露骨に露呈しているが、すでにみたようにこうした「お高くとまった、高飛車な」認識は、現地の女性たちの認識とはおおきく隔絶している。しかしその隔絶は、ホスケン・リポートの立場からみれば、現地の女性たちが「いまだ解放」されておらず「男性に支配」され続けている証拠にほかならず、そうした「男性支配」の手段こそ「女子割礼」である、となればここで議論が循環していることは明白であろう。

仮想論敵は女性には弱いから保護しなければならない、さもないと売春婦になってしまう、だから女性には隔離せねばならないし陰部封鎖が必要だと主張する。——とされるのに対し、ホスケン・リポートは「父権制の社会は、女性に売春婦以外の仕事につくことができる教育や訓練を与えないから」こそ「アフリカや中東のどの都市でも、売春が広まっている」と因果律を転倒させる。売春婦うんぬんは女性を「保護」の名目で隔離し、孤立させるための口実にすぎない、というわけだろう。強姦のおそれを口実にして女性を支配する「政治的手段」こそ「女子割礼」の隠された実態である、という論法である。ここでは、一見「女性割礼」が問題にされながら、実はそれが「アフリカや中東のイスラーム教徒の地域」における「男女の隔離、子を生む年齢の女性を隔離する慣習」そのものを「事実に基づかないこ

じつけから生まれた」(25-26頁)誤った因習として否定するための手段にほかならなかったことが明白になってくる。

2-2-3-5 最後に、こうした非西欧、非近代社会にたいする糾弾の背景には、自分たち西欧の家族観を絶対視して、その利害を保全しようとする姿勢が見え隠れする。「子供たちは、育ててくれる母親や女性たちが劣った者として扱われたり、女性であるために軽蔑されているのを見て、なぜ積極的な人間になることができるだろうか」との主張からは、人間は男女とも積極的な人間として生きるのが当然である、とする価値観が前提となっていることが伺える。

さらに「熟練した保健医や医師が、衛生的なやり方で幼い少女を切除することは進歩であるといったようなあいまいな言い訳をして、金もうけのために、アフリカや中東の金持ちの子供たちに手術をしている」といった認識は、現場の社会的責任を果たしている医師や、自分の幼女に「良い」安全な手術を受けさせたいと考える「開明的」で比較的裕福な両親にはとうてい納得できない言い掛かりであろう。

そしてそんな「国際的な衛生援助計画の一環として与えられた器具、抗生物質などが、ますます多くの子供たちを切除するために用いられている」(18頁)現実を非難する口調には、自分たちの援助が悪用されているとする義憤が強く漂う。

最後に、「男女の隔離や女性の性的去勢は、たがいに信頼しあわなければならない家庭生活を破壊する」(23頁)との認識は、イスラームの伝統的家族観への反発であるばかりか、みずからの西欧社会における家庭が、ほかならぬフェミニズムをもその一兆候とするようなゆゆしき危機に瀕しているというその現実を、他者の社会のうえに投影することで転移し、一種の責任転嫁を図ろうとした、無意識裡の防衛機構ではないか、と言ってはあまりに勘ぐりすぎというものだろうか。しかしこれまたいささか先回りして言っておけば、学生への課題図書に筆頭にあげられていた片倉もと子氏の著書に著されたイスラームの女性たちの日常生活よりは、まさにこうした西欧フェミニストの理想が現実にイスラーム社会では実現されている、とい

った印象を与えるもので、これはきわめて政治的な意図とイスラーム擁護の使命とに貫かれた、逆ユートピアの本である。

2-2-4 ラズワーク夫人による反論

こうした西欧側の見解に対して、吉田康彦氏はジュネーブを本拠に啓蒙宣伝活動を繰り広げているエチオピア人女性、ラズワーク夫人の主張を紹介している。「彼女とヨーロッパのNGOとの間には、基本的戦略に大きな違いがあるの気付いた」として、吉田氏はこう指摘する(以下の文章を授業前半の最後に検討した)。

「ヨーロッパ人が戦闘的・挑発的であるのに対し、アジスアベバ大学で歴史を学び、アフリカ土着の知識人として育ったラズワーク夫人は、女性割礼を純医療保険(ママ)問題としてとらえている。彼女は毎月、スーツケース大の女性性器の模型をたずさえてアフリカ奥地の農村をまわり、『娘さんの割礼はやめなさい。女性には天然の処女膜があり、処女性は十分保護されています。切ったり、縫ったりすると、ばい菌が入って病気になる。エイズも移ります。丈夫な赤ちゃんが産めなくなります』と、母親たちに説いてまわっている。

『このほうが説得力があります。人権やオルガスムの権利を振りかざすのは逆効果です。アフリカにはアフリカなりの流儀があります。産児制限も家族計画も、ヨーロッパ流の押し付けはいけません』と力説している。もって他山^(ママ)の石とすべき)であろう(8)。

最後の「他山の石」は著者の日本語表現上の早とちりだろうが、いささかならず失礼な表現で、むしろ凡人たるものもってラズワーク夫人の聡明な見解の驥尾に付したいとでも記すべき所だっただろう。そして授業の眼目も、ホスケン・レポートとこのラズワーク夫人の見解の差異に、異文化理解という文脈のなかで女性問題が決して一筋縄にはゆかぬ振れを内包している実態をかいま見てもらうことにあった。

*

概略以上のような、はっきりいって陰惨な話題の思弁的な紹介につづいて、後半目崎教授から一転して現場経験者ならではのシリアのフィールド・ワークに立脚した具体的なお話を伺った。子育てから羊の乳しぼり、テントの設営といった力仕事まで家庭のすべてを切り揉みする肝っ玉母さんたちの溢れるまでの存在感(そして遊牧に出掛けてしまう男たちの存在感の欠如と無為に過ごす存在なさ)。結婚式の晴れの日に花嫁を囲むひたすら明るく屈託のない女の子たちの表情。さらには男性の教師が女兒を教えることが不可能なため、かえって日本以上とも見える女性進出がすすんで、若く元気な女性教員たちが縦横に活躍し指導権を完全に掌握している小学校の情景、といった、前半とは好対照な風景であった。とりわけ女性の社会的地位や活躍の可能性に関して、前半と後半でほとんど正反対の印象さえ与えるこの対比に対して、それでは学生たちはいかなる反応を示したか。

3 学生諸君の反応

学生諸君には、第1回目の読書感想レポートのほかに、学期中2通のレポートが要求されていた。このうち稲賀・目崎の講義に触発されたレポートは16件を数えた。その反応は図式的にいうと、(3-1)とにかく女子割礼の実態に初めて接して完全にパニックを起こしたもの、(3-2)女子割礼の実態と、目崎先生のお話とのあまりの格差に、何が真実か分からなくなって当惑したもの、(3-3)さらに片倉もと子氏の著書を読み比べてみて、まるで女性の理想境かのようにみえるそのイスラーム世界描写に、ますます何が本当か分からなくなりつつも、イスラームの多様性を理解しはじめたもの、といったように区別できた。

3-1 最初のグループはホスケン・レポート同様の憤りに染まった文章である。「洗脳」されたか、女性解放の主張に沿ったレポートを書けばそれで単位になると短絡した結果かとも推察されようが、実態はどうやらそれ以前の水準とみるほう正しいようである。まず日本においても性教育は未発達とみえて、解剖学的な説明がさっぱりわからず、途中になってようやく何のことかおぼろげに分かったとたん、ショックのあまり呆然となった女子学生

がある。こうなるともはや理性的な批判や反省は不可能で、そんな残酷なことが許されるはずはない、イスラームは人権蹂躪で許せない、アフリカは残酷で怖い、といった絶叫調のレポートとなってしまった。

3-1-1 そこには事実誤認が不可避であった。まず問題となる「女子割礼」実施地域とイスラームとを同一視する場合は頻繁にみられた。地図を示し、また配布したプリントでも、女子の割礼がクールアンには「一行も書いてない」(吉田180頁)ととりあえずはイスラームと無関係の社会的慣習である、ときちんと指摘しておいたにもかかわらず、この短絡は防げなかった。また学生の常識はまちがっても信用してはならないもので、男子における割礼のこともにも授業で触れたにもかかわらず、これがまったく視野から脱落したレポートが何件も見られた。つまり、男は同じ被害には会わないのに女だけが犠牲者になるのは許せない、という見解である。最初は男子の割礼についての証言も、クラパンザノの『トゥハーミ』から引用する予定だったのが、時間の関係で省略したためもあったかと反省する(9)。またホスケン・レポートの配布した抜粋に、「男性にこれと同じような手術、ペニス切除が行われれば、人格の冒涜として世界中からすぐに苦言が起ころうであろう」(18頁)とする箇所があったため、生理学的無知も加わって短絡した反応が生じた可能性も否定できない。

3-1-2 ここで括弧に括って一言脱線しておけば、「同様な手術」としてペニス切除をうんぬんすることは、解剖学的ないし、伝統的な生殖器にまつわる疑似科学的言説の伝統のうえで複雑な問題を含む。さらには実際、西欧においても一八世紀から一九世紀にかけて、性的な原因による精神疾患の治療として女子生殖器に手術を施すべしとする理論や実践があった。これも前提として紹介する予定でいながら割愛したという事情もある(10)。時間の都合と、あまりに錯綜した話となるのを避けようとした配慮からだ、かえって功を奏しなかった。そうでなくても、すでに今回の話はその主旨を学生諸君に理解してもらうには、あまりに複雑であった。話題の刺激が強ければそれだけ正確に理解

されるとは限らぬことも推察された。

3-2 第2のグループの場合にも第1のグループと共通した誤解がある。つまり目崎教授紹介のアラビア半島の事例と、アフリカを中心とする前半の女子割礼とが、地域差を考慮せずに重ねあわせになったような反応が少なくなかった。

3-2-1 さらに「どちらが本当か分からない」、という反応は別の意味でも興味深い。つまりまず正解は一枚岩よろしく全イスラーム圏なり全アフリカなりを通じてひとつしかないはずだ、とする教科書的な発想。ついで女子割礼がある社会では女性たちは男性に支配され悲惨な境遇にあるに決まっている。それなのにスライドで見た女性たちは明るい、だからおかしい、納得できないという過度に単純な思考法だ。これは、割礼は悲惨であり女性の権利にたいする許しがたい冒涜である、とするホスケン・レポートの主張にまったく疑問をさしはさんでいないからこそ発生する疑問にほかならない。

スーダンの女性たち自身の証言も紹介したにもかかわらず、こちらにはまったく言及がなかったのも印象的である。おそらく日本の常識を前提として、その尺度から見て事態をひたすら悲惨で残酷で不正と見て取ったのであろう。ただしこの点については追って岩本先生より、以下のご指摘をいただいた。

つまり、日本では初潮を迎えた子女に母親からもっぱら負の価値を暗示する教育しかなされておらず、血の汚れが外傷となること、また出産にたいする恐怖を植え付け、母親たることに不信を抱かせる社会環境が背後にあるとのことである。この指摘を一般的事実と認知するには、なお時代別・世代別の追跡調査を必要としよう。だが、女性生理が今なおタブー視され、自らの性を対象化できていない日本の大学生に対する心理的配慮までも大学の授業で要求されては、到底マスプロ教育では対応できまい。高校までの抖となった心理学カウンセラー業務まで大学の一般教育が引き受けなければならぬとしたら、これは重大な社会問題である。

3-2-2 善悪の判断において情動的なあまり判断中止に陥る傾向。これも女性論の授業でもしばしば見られた現象である。例えば「女性の政治参加の低さ」の例証として、衆議院における女性議員の比率は世界各国の議会における比率のなかで130カ国中112位である、といった指摘がなされると、すぐさま日本は遅れている、という反応が帰って来る。そこにみられる体質はまさに横並びをもって善と取り違え、世界の趨勢と我が身を比べないと安心できず、そして統計というものの数字の魔術に対する完璧なまでの順応性である。昨年までは日本市場の特殊性として外交交渉における外圧を防ぐ切り札であったはずのゼネコンの「談合」が一つのまにやら汚職と同意語になりはてるや、その理由も問うことなくメディアが「談合」追及に血眼になり、大衆は「談合」が見つければそれだけで何か不正が行われたと、素朴にも信じてしまう体質。ホスケン・リポートがあまりにみごとな洗脳効果を発揮するこの批判精神の欠如した風土に、大衆操作の容易さを見た思いがして、いささか背筋が寒くなった。

3-2-3 さらにこのグループの学生諸君にとって盲点となっているのは、目崎先生の撮影したフィルムがけっして普通に取得できる情報ではなかったという点である。結婚式という特別の場合でなければ、けっして外部の男性が女性のテントの内部にまでカメラを持ち込むことはできない。その映像資料はまことに貴重であるがゆえに、来年度の東京書籍の地理の教科書に7枚も使用されることになったという（『あたらしい社会・地理』中学生用教科書平成5年版より）。日本最高のアラビア語遣いと同行してそうした特権的な侵犯行為を例外的に許されてはじめて回収できる情報を、日常と混同する危険。すべての情報は無料でメディアを通じて供給される、といった素朴な思い込みに埋没する危険。

3-3 そうした危険を補完する意味で、女性にしか見えて来ないイスラーム社会の姿を活写したのが先に触れた片倉氏の著書といえよう。だがこれを読んだ一部の学生たちは、かえってますますイス

ラームが理解困難になってしまったようだ。

3-3-1 ここで急いで補足しておけば、今回の授業ではイスラームに関する基礎的な思考の枠組みを提供しておくことは、時間の都合で省略せざるを得なかった。しかしそのお陰で片倉氏の本を読んだ学生たちはかえって新鮮な印象をもった様子である。例えば、ヴェールを被らないと外出できないのは不自由で、女性が差別されている証拠である、といった主張がどうやらイスラーム世界で女性として生活をした経験の欠如を物語る無理解の産物でしかなかったことに、何人もの学生が気付いた。不特定多数の男性から「見られる」自分を意識するあまりかえって商品化されてしまう欧米の女性に比べて、ヴェールに包まれた女性は「見る」自分の積極性と、「匿名の解放感」を享受しているそうだ。女たちだけの集まりとなってヴェールを取るやその下からは華麗に着飾った姿が出現するという。また男女が隔離されたイスラームでは、西欧の女性とは違って「女の世界」を捨てて「男の世界」でも対等に張り合うといった背伸びが不必要だから、かえって女性進出が促されうる。サウジアラビアには女だけの銀行さえある。そもそもアラブ社会は元来母系社会であったと最近では推定されている、といった箇所がリポートにも何度となく言及されていた。

外から見れば近づきがたく閉ざされたイメージがあるが、内部に入ってしまうえば自分は見られることなく外から必要な情報は安全に手に入れられる。イスラーム都市や住宅にも共通するこの基本構造の反復の最小単位としてハーレムがあり、またヴェールがある。閉ざされていることは外から見れば幽閉であるが、中に住んでしまえば世界の中心に伸び伸びと暮らせる気安い空間を我が物とすることともなる。いかにイスラームの女性たちがそこに安らぎを覚えているかは、今から十年もまえにエジンバラで出会ったクウェート出身のそれは裕福な女子学生たちの台所での行動を見てよく悟られた。テレビ映像機が何台も並ぶ居間では際限なくペチャクチャとおしゃべりができる環境が当然となってしまうえば、いまさらわざわざ自分の肉体を酷使してまで物見遊山に行く気はない

といった風情なのだ。丸まると太った彼女たちは遠足で遠出をしても決してバスから降りて歩こうとはしなかった。もとより男性と張り合って社会に進出するなどといった発想とは無縁の境地で、女だけの世界に自足していた。そんな彼女らが「解放」されていないなどと言い募っても、埒はない。

3-3-2 しかしこうした言わば内在的なイスラーム理解と並んで、片倉氏の本にたいする懷疑を差し挟む学生も出た。例えば配布しておいたプリントにあげたモロッコのファーティマ・メルニッシの批判的見解(11)などを前にすると、イスラームにおいて女性が無不自由なく生きているかの印象を与える片倉氏の本が、裕福でありなおかつ社会進出を果たしているかなり恵まれたイスラーム女性の例を都合よく葛織りにして、いささか事態を理想化しすぎているのではないかとの嫌疑も生まれて来る。プリントで配布した宮治美江子氏の研究を参照しても、イスラームにおける女性の地位については、地域によっても、また社会階層によっても、格差は大きく、また視点によって同一の事態も肯定的にも否定的にも解釈されうる。その一步手前までやって来た学生は、人数こそ少なかったが、たしかに出現した。

4. 教官側の意図との食い違い

ざっと以上のような反応が学生諸君からは得られたが、量的に言えば、(3-1)の水準の学生がざっと7割、(3-2)が2割、残りの2-3人が(3-3)に該当する意見を断片的に述べた程度にとどまる。本来の授業の意図としては、それを良しとするか否かはさておき、ホスケン・レポートにあるような一見高邁な正義感の発露の裏に隠された裏面に気付いてはしなかったのだが、問題をこの方向から考察したレポートは1通も見られなかった。女性差別の存続する社会にたいしては、それを差別して少しも憚らないという、二重底になった差別意識。そこには、そうとも気付かれぬままアフリカ社会、イスラーム社会に対する植民地主義的侮蔑が、衣装を変えて再来しているのではないか。異文化を評定する場合の基準に、自らの、ないしは西欧で通用している基準をそのまま適応してしまっただけのようだろうか。西欧の主張する女性差別弾劾と、地元の文化の

尊重と。その論争当事者のうち前者のいいなりに情緒的に同化して後者を居丈高に糾弾する姿勢そのものに、いつしか先進国へと脱皮してアジアの出自を忘却した日本の今日の学生たちの、無意識のままの第三世界蔑視の姿勢があるのではないか。そうした疑念を学生たちに抱かせるという授業の目標は、以上の結果を見る限り、達成されなかったと判断せざるを得まい。

4-1 こうした状況に鑑み、提出されたレポートには、教官側が意図した次ぎの段階への道しるべを添付した。それは1994年1月6日づけ「朝日新聞」に見られた囲み記事である。それは『カラー・パープル』を書いたアメリカ黒人女性作家アリス・ウォーカーが制作したドキュメンタリー映画「戦士の印」を巡って発生した論争である。「女性生殖器の切断と女性の性的無能化」を話題としたこの作品が最近ワシントンで上映されるや、アメリカ合衆国在住の「アフロ・アメリカン」を中心に、この映画はアフリカ社会を歪めて描いている、アフリカの伝統を無視して勝手な主張をしている、とする怒りの声があがったという。ウォーカーは一昨年この主題で『喜びの秘密をかかえて』と題する小説も発表していた。割礼ゆえに血の妄想に苦しむ女性たち、という設定であるという。ウォーカー側が女子割礼を文化の問題ではなく、女性にたいする拷問でしかない、と断定しているのに対して、スーダン出身女性の米国在住者などは、女性解放論を生そのまま押し出すことで、アフリカの結婚制度や慣習を割り切ろうとするウォーカーらの態度に、それが影響力ある作家の手になる仕事であるだけになおさら困惑していると、この記事は伝えている。

4-2 残念ながら、この記事に応答してこれを掘り下げたような学生レポートの存在は確認していない。今回の女性論では、第3回目のレポートは第2回目のレポートを提出した教官とは別の教官に提出することになっていたためである。学生の問題意識を段階を追って追跡し、徐々に指導を練り上げる工夫がなお必要とされるだろう。さらには、もとより一方的に「正解」を伝授することが無意味な以上、レポートの講評を頼りに学生諸君が討論を通

じて自分の考えを練り上げる機会が必要だろう。現行の「総合科目」の枠で開講責任者にここまでは要求できないが。

4-3 最後に、学生たちの討論のための可能な主題の一例として、ライナ・ミナイの著書から、パキスタンで最大のイスラーム政党党員の第二夫人となった元アメリカ人、マリウム・ジャミラーの証言を引いておこう。ドイツ系ユダヤ人を両親にもつ彼女は--とわざわざ著者ミナイが注釈つきで登場させるところに、この夫人の特権性と西欧向けプロパガンダ要員臭さがいくぶん鼻につくが--イスラームが夫からの一方的な離婚を認めることを評価して、その正当性をこう説明する。離婚裁判で勝とうとする夫が人前で妻の悪口を言い立てるよりも、密かに離婚されるほうが女性にはるかに傷つかずにすむだろう。離婚をちらつかせて妻を脅かすような夫こそ、そもそも夫として失格だ。また、現代の女性たちは愚かにもイスラームの特権を自ら放棄して、家庭の外では男性と競いながら、母親と家庭の主婦という「女性に定められた神聖な運命」からも逃げられず、過度の負担を背負うあまり、結局両方ともやり損ねている、と。そうした立場にたつ彼女は次ぎのような、多分に政治的な臭いも立ち込める公式見解を、改めて確認してみせる。

「イスラームの考え方からすれば、男女平等の問題は意味のないことです。バラとジャスミンが同じかどうか議論するようなものです。イスラームでは女性の社会的役割は、男性と競い合うことではなく補完することだと考えられています。男女それぞれもって生まれた本来の血からに应じて義務と働きをもっているのです」(12)。

クールアンの第4章34節に由来するであろうこの立場は、男女平等をこそ大前提とする西欧のフェミニストたちには到底受け入れがたい教条だろう。突き詰めて考えれば、この論点を巡って神の言葉とされるクールアンの権威と世界人権宣言とは、その原理において真っ向から対立せざるを得なくもなりえよう。だがそうした不毛で硬直した教義論争に入る前に、ひとことだけこう学生諸君に問うてみたならば、その反応はどうだったろうか。はたして誰にどの立場から、このマリウム・ジャミラーの意見はハスケン・リポートに比べてより妥当

するとか、妥当しないとか決め付ける権利があるのだろうか、と(なお、この抜粋もプリントに掲載しておいたが、この部分を問題にしたリポートは残念ながらひとつも現れなかった)。

5. 工夫すべき将来の課題

5-1 最後に、より一般的な次元で、異文化理解を妨げた障害を2つ指摘しておきたい。まず課題の提出に関しては、上の例にも示したように、文化的な差異の衝突する論点をなお十分に絞り込む必要があろう。「女子割礼」に限るならば、ホスケン・リポートとラズワーク夫人の見解の差に注意して、どちらがより妥当しそれぞれどこに問題点があるかを文化的な背景の違いに沿った具体的な論拠を示しつつ考察せよ、といった設問のほうが好ましかったろう。議論の対立点を明確にしたうえで、データに立脚して反論を加えよ、という指示は開講責任者からも掲示されてはいたが、実際にはたんなる感想文を越える水準のリポートは得られなかった。

5-2 第2に情報に対する批判精神と免疫の欠如がある。ホスケン・リポートの最も教条的な決め付けにあっけなく「洗脳」されるあの素直さが、日本のほこる中等教育の成果なのだろうか。さまざまに対立する意見を盛り込んだ資料を渡したにもかかわらず、それらを引用して対立の図式を描き出した学生は2名のみにすぎない。もとより簡単に正解など得られないこうした論争にたいして、付和雷同することなく自分の意見を鍛えてゆく訓練があまりに欠如している。とりわけ将来小・中学校の教諭になる可能性のある教育学部の学生に、あまりに純情かつ幼稚な反応が多くみられたのには、いささか当惑した。

状況の流れに身を任せて行けばよいといった日本の微温的な雰囲気は、さまざまな価値観の対立のなかで生きて行かねばならないこれからの世界に対してうまく対応できる処世術なのか。それとも日本という閉じた国の受験制度に柔順な国民にしか通用しない隘路なのか。明らかなのは、イスラーム社会、アフリカの価値観と欧米のフェミニズムとの接点で発火した「女子割礼」問題は、日本流

の受験術では解決がつかないが、しかし日本国籍所有者として、これはもはや対岸の火事と高みの見物をしていてよい問題ではない、にもかかわらずこのことが、学生諸君にはまだ納得されてないことだ。

6 結論にかえて

イスラーム世界を非イスラームという立場から理解できるか(13)。この大きな認識上の問いの一端として、「女子割礼」という情報を例にとって、それがいかに学生に理解されるかされないか、という実験結果の具体的な分析を試みた。大学という環境はもはや教師から最終的な正解が提供されるのを受動的に身につければよい場所ではない。だがそうした正解なき模索の世界は、日本で中高等教育を一貫して受けて来た学生たちには、今までまったく未知のままに隠されてきた。そこにいきなり、問題意識もて、自分で資料を探索せよ。それに基づいて自分なりの意見を提出せよ。それを学友の前で展示して討論し、意見を修正しながら、見識をやしなう訓練をしろ。そうしなければ外国の友人と付き合っていくことは不可能だ、などと高飛車にお説教をしても、学生諸君はそっぽを向くだけだろう(14)。

競争原理ではなく和をもって尊としとする国なのだからそんな面倒なことは要求されても困る。外人なんかとは付き合わなくても日本で目立たずよい子をしていれば世の中渡って行ける。そんな唯我独尊の極東の極楽トンボの生息する浮き島で、それが政教一致のイスラームであれ、訴訟社会といわれる西欧や「米国」であれ、およそ異文化理解の困難さを学生諸君に切実な気持ちで受け取ってもらえるような心理的な受け皿のできるのはいつのことか。日本の産業の海外依存率の高まりが東南アジアを初めとする外国で摩擦を起こすか、さもなくば日本が受け入れざるを得ない移民の人口比率が日本人社会の臨界点に達して、数年前の外国人問題の比ではない深刻な国内的な社会問題として噴出することになるのも、もうそんなに先の未来ではないはずなのだが。繁栄の頂点をすぎながら捕らえ所のない倦怠感と閉塞感とに包まれたこの極東の「経済大国」で、満ち足りるでもなくひたすら怠惰に消極的に自足し、外に対する感性を麻痺

させたまま、異文化の理解にもましてや誤解にももはや興味を示すことなく、自らの性のタブーの前であっけなく平静を失い思考停止に陥る大学生。教育の見えざる文化障壁がここにある。

註

(1) この分野については、日本の前衛芸術を具体例とした理論的考察、Shigemi INAGA, "L'Impossible avant-garde au Japon", Connaissance et réciprocité, Louvan la Neuve, CIACO éditeur, 1988参照。日本語訳は「異文化理解の可能性とその限界」として、『比較文化』、東京大学教養学部紀要、1988に、また中国語訳は『理解異質文化的可能性と極限性』として『獅在華夏——文化双向認識的策略問題』、中山大学出版社、1993、99-110頁。英語訳も Year Book of Comparative and General Literature, に掲載の予定。

(2) 拙稿「ソシュール・精神分析そしてニーチェ的転換」、『状況』1991、1月号はそうした反省にたって今日の大学における「学問」の在り方を批判した。また学生諸君の反応とそれにたいする対応については、『総合科目冊子』三重大学一般教育、1994年度の「世界の国々——異文化の理解にむけて」開講責任者としての拙報告参照。

(3) そのいささか性急な糾弾は、拙稿「『リポート/北京コロックに参加して』を読んで」、『ふらんす』、白水社、1994、3月号、51-52頁を参照のこと。

(4) 犬養道子『国境線の上で考える』岩波書店1988、172-3頁。

(5) Franc P. Hosken, The Hosken Report, Genital and Sexual Mutilation of Females, 3rd. revised edition, 1992 ここではフラン・ホスケン著、鳥居千代香訳『女子割礼』(BOC出版、1993)の抜粋および添付図表。吉田康彦『美辞麗句を使うべし——国連十年の異文化体験』(NHK出版、1992。180-83頁)。

(6) ホスケン前掲書、108-09、115、134頁にある引用部分を利用。引用符の内部については、原則的に編著者の意図的な改竄はないものとして、以下の議論を進める。

(7) 同上書、17-27頁。

(8) 吉田前掲書 183頁。

(9) ヴィンセント・クラパンザーノ、大塚和夫、

渡部重行訳 『精霊と結婚した男』、紀伊国屋書店、1991。

(10) 山崎カヲル「身体的快楽の系譜学」『現代哲学の冒険 4: エロス』 岩波書店 1990年、79-89頁。

(11) 『現代思想』、臨時増刊、総特集 イスラーム--オリエンタリズムと現代、1989、vol. 17-14、12月参照。

(12) ナイラ・ミナイ、久富木原暁美ほか訳 『イスラームの女たち--ヴェールのかげの真実』、BOA出版部、1992、307-08頁。

(13) 筆者は同様の観点からすでに幾つかの論を発表した。サルマーン・ラシュディ『悪魔の詩』を巡る考察としては、「『悪魔の詩篇』をめぐる反響瞥見」、『ユリイカ』、1989年11月号、172-198頁。また Shigemi INAGA, "The Negative Capability of Tolerance --The Assassination of Hitoshi Igarashi", International Conference on Cross Cultural Communication and International Understanding, Sep. 12-15, 1991 (to be published in 1994)。およびその縮小日本語版として「寛容の否定的能力」、小堀桂一郎編『東西の思想闘争』(中央公論社、559-588頁)。

異文化の理解と誤解

学内特別研究経費

学際的・総合的教育の方法論

三重大学人文学部文化学科

1994年3月